

第70回八丈島民大学講座 講義要旨

2016年2月22日・23日 東京都八丈町 七島信用組合八丈島支店ホール

講師 ドイツ文学者 池内 紀 氏

『過去の克服』に向けて～ドイツから学ぶもの

1, 朝鮮戦争、チェコ事件、ベルリンの壁崩壊など、歴史的イベントを体験して考えたことは、「戦争は儲かる」ということ。日清戦争で清国から得た賠償金で全国に鉄道が整備された。朝鮮戦争の特需で戦後の混乱から立ち直った。日本の繁栄の陰には中国や朝鮮の人びとの犠牲があったことを忘れてはならない。

2, ドイツはなぜ100万人を超える中東難民を受け入れているのか。

それは、憲法で難民申請の権利を保障しているから。すでに500万人のトルコ系移民を受け入れている。ドイツには家族を支えられるだけの仕事があるので、中東難民はドイツを目ざす。ドイツも少子国家。安い労働力が得られることは国としても得策との考えがある。メルケル首相は、グローバル社会とは生まれ育ちの違う人びとともに暮らせることと述べている。

3, ドイツはなぜ、またどのようにして原発廃止（全廃）を決めたのか。

老朽化した原発の延長にも賛成だったメルケル首相は3.11の翌日、すべての原発を総点検し、自ら凍結を決断。二つの委員会で原発の可否を検討した。その一つは原発以外を専門とする17人からなる倫理委員会。原発を稼働することは「倫理に反する」、原発のリスクは他の発電より高く想定外の事故が起きることは倫理に反する、「負の遺産」を次の世代に残すことも倫理に反すると、経済性よりも倫理性を重視、6月の連邦議会で原発全廃が決まった。

4, ドイツ人はなぜヒトラーを熱狂的に支持したのか。ナチスドイツの12年間を、どのように生きたのか。

オーストリア皇太子の暗殺事件で始まった第一次世界大戦は、新兵器による大量殺戮の近代戦争だった。戦後の賠償金を目当てに多くの国が参戦、日本も情勢を見ながら参戦してドイツ領有だった南洋諸島と中国の一部を占領した。ドイツが負けると、ヴェルサイユ条約でフランスの強硬派がドイツ年間予算の23年分にもあたる多額の賠償金を要求した。その結果猛烈なインフレとなり、まじめで勤勉といわれるドイツ国内の中産階級が没落した。ヒトラーは「屈辱的なヴェルサイユ条約の破棄」「強いドイツを取り戻す」といっ

た分かりやすいスローガンを掲げて台頭、視聴覚メディア、飛行機からの宣伝ビラ、ポスター、レコード、映画などを使った演出も上手かった。ユダヤ人に対する迫害も「ドイツの安寧の為の法律」により、直接ユダヤ人という言葉は使われなかった。ナチズムとは、ふつう「国家社会主義」といわれるが、実は「国民社会主義」であり国民すべてが参加した。制服国家で管理しやすく、権限はヒトラーが握っていた。選挙で90パーセントの支持を得るといった民主的な方法で独裁制が維持された。ラジオではドイツの放送しか流れず、それ以外の放送を聞くには特殊な装置が必要で、それを買に行っただけで直ちに密告されてしまうような状態だった。

5、ナチス・ドイツの膨大な「負の遺産」を、ドイツ人はどのように克服したか。

ドイツとポーランドとは国交断絶状態だったが、1970年西ドイツ、ブラント首相の時、戦後25年目にして初めてポーランドに入国がなかった。記念碑の前で花をささげ石の様に膝まづく姿が放送されたが、このことがその後の和解のきっかけとなった（ポーランドではワルシャワを壊滅させたドイツを拒否していた）。

そのころからアウシュビッツ裁判が始まった。戦後、一般人として生活していたかつてのナチスドイツ軍人の一部が、ドイツ人によって裁かれた。批判もあったがヴァイツゼッカー大統領の「過去の歴史を見ない人は現在も見ない」との言葉が示すように、過去の罪も厳しく追及した。ポーランドとドイツでは歴史観を共有し、同じ教育をしている。現代（60-70年）から過去へと学ぶ。

極東国際軍事裁判（東京裁判）では裁かれない戦争責任者もいた。朝鮮戦争により、警察予備隊、沖縄の基地固定化等が出来た。1960年の安保闘争の後、岸内閣が退陣。その後、経済金融に強い池田内閣により、所得倍增計画で毎年9%の増を打ち出し、公約通りになった。この頃から日本の経済一辺倒が刷り込まれた。大型ダム、首都高、新幹線などが出来、古い物が一斉に壊されてしまった。

ドイツ人は議論するときは相手の話を最後まで聞く。それが議論の基本である。そうすることでより考えを鍛えることができ、人の話を最後まで聞くという我慢強さが養われている。小さな子供にも、最初はちゃんと話せなくても最後まで発言させて自分の意見を言わせることがあたりまえ。

メルケル首相は、毎年アウシュビッツの記念日に声明を出している。そのなかで「忘れてはならない記憶として持ち続けることが義務」と言っている。それに対し、日本人は忘れることを良しとするところがある。過去をきちんと見ない、敗戦を認めないという風潮もある。「ユーフェミズム」という言葉は、物事をあいまいにぼかし、何をしているかわからない、実態は全く違うことをさういう。